

タカ類の渡り衛星追跡

樋口広芳（東大・農・生物多様性）

サシバとハチクマは、日本に渡来して繁殖する代表的な渡り性タカ類である。秋、サシバは本州を西進し、南西諸島から東南アジア方面に渡るとされている。ハチクマは九州から東シナ海を横切って中国に入り、南下して東南アジアに渡るとされている。しかし、渡りの正確な経路はどちらの種でもわかっていない。私たちはアルゴスシステムを利用した衛星追跡により、この2種の渡りを追跡することに成功した。使用した送信機は、米国マイクロウェイ社製およびノーススター社製の太陽電池方式のものである。

これまで追跡に成功しているのは、サシバ7羽、ハチクマ3羽である。サシバは南西諸島南部と本州各地との間を行き来したが、一部、台湾北部やフィリピン方面まで渡ったものもいる。同一個体で比較すると、春の北上と秋の南下はほぼ同じ経路をたどるが、四国、琵琶湖周辺、飛騨山脈などで部分的に異なっていた。同一季節の渡りの場合、渡りの開始時期、渡り経路、到着時期などがほとんど同じである例がある一方、かなり異なる場合もあった。春の北上は秋の南下よりも短時間で終着点まで到達することが多く、繁殖地により早く到着することが重要であると考えられた。春秋ともに、内陸を渡るさいには山岳の間を流れる大きな河川沿いに移動する傾向があった。山腹斜面に発生する上昇気流を利用しているのではないかと考えられる。

ハチクマは秋、サシバと違って東シナ海を越えて中国に入った。大陸内部を南下してマレー半島を経由し、インドネシアやフィリピンに到達した。渡り経路は全体として大きく迂回しており、総延長移動距離は1万キロを超える例がある。春の北上では、はじめは秋の南下経路を逆にたどるが、途中から大きくずれて朝鮮半島北部に向かった。その後、朝鮮半島を南下して九州に入り、東進して繁殖地に戻る、非常に大きな迂回経路をとった。同一個体では、春秋の渡り経路は年が違ってもよく似ていたが、一部ずれる地域もあった。若鳥は越冬期間中、マレー半島周辺を移動し続けたが、春に日本には戻ってこなかった。

サシバとハチクマの渡りの経路が異なる理由は、今のところよくわからない。採食習性や形態上の差異が関係しているのではないかと思われる。ハチクマの春秋の渡り経路の違いには、食物や気象の条件が季節によって異なることが関係している可能性がある。

今後は追跡例数を増やし、また野外調査と組みあわせながら、渡り経路の実態や経路選択のあり方について詳細に研究していきたいと考えている。